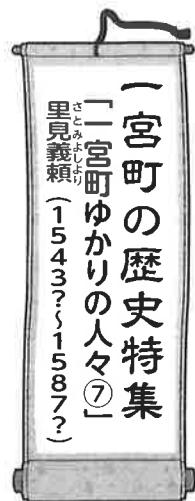


平成29年4月号



里見義頼は安房国(千葉県南部)の戦国大名・里見義弘(1525?~1578)の子として生まれました(異説あり)。

安房里見氏はもとは上野国(群馬県)新田の出であり、戦国時代に関東の動乱の中で安房に入国し、戦国大名化した一族です。義堯(1507~1574)とその子義弘の時代を上総・下総まで進出し、勢力を拡大しました。しかし、相模(神奈川県)の北条氏の勢力に押され、天正5年(1577)に和睦を結びます。その際、両者の領土の境目は、西は養老川、東は一宮川だったと考えられています。

天正6年(1578)、義弘が亡くなると、里見氏では後継者争いが勃発します。安房国を拠点にしていた義頼は異母兄弟の梅王丸と家督を争い、天正8年(1580)に梅王丸の拠点の上総国を制圧し、家督を継承しました。その翌年には反旗を翻した小田喜城(現大多喜城)の正木憲時を滅亡に追い込み、領国支配を強化します。この時、一宮にいた正木氏も反乱に加わっ

たようで、憲時とともに滅亡したとみられています。写真の玉前神社への寄進状は、天正10年(1582)のもので、憲時の乱の後、一宮地域は里見氏がしばらくの間直轄したようです。なお、東浪見地区は里見氏家臣の正木時盛という人物に与えられました。

義頼は北条氏との同盟を維持しながらも、のちに天下人となる豊臣秀吉や反北条氏勢力と音信をもつなど、外交面でも手腕を発揮しました。

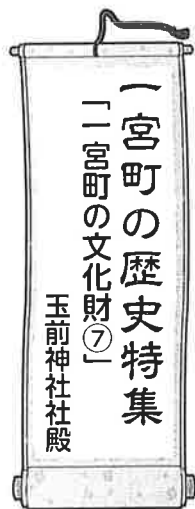
内政・外交両面で活躍しましたが、晩年は病気がちだったようで、天正15年(1587)、安房岡本城(南房総市)で亡くなったといわれています。



▲ 里見義頼寄進状(町指定文化財。玉前神社所蔵。現在県立中央博物館大多喜城分館に寄託中)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年5月号



玉前神社は一宮町の名称の由来である「一宮」すなわち、上総国(千葉県中央部)で最も社格が高い神社に定められた由緒ある神社です。祭神は玉依姫命です。

古くから信仰を集めてきましたが、創建年代は資料がないため不明です。延長5年(927)の『延喜式神名帳』では「名神大社」という社格に列せられており、この頃には既に上総国における有力な神社として国家的に認められていたことがわかります。また、例祭である「上総十二社祭り」(県指定無形民俗文化財)の始まりが大同2年(807)といわれていることから、それ以前には既に存在していたと考えられています。

戦国時代後期に戦乱の中で一宮城とともに兵火に遭い、焼け落ちたため、古記録や宝物などが失われたといえます。

その後、飯岡の玉崎神社(旭市)に一時避難し、現在地に再建されました。天正10年(1582)には里見

義頼(広報前号文化財コラム参照)より宮地の寄進をつけています。現在の社殿は残された棟札によると貞享4年(1687)の建築であることがわかります。この棟札は社殿とともに千葉県の指定文化財となっています。

明治4年(1871)には国幣中社に列せられました。その後、明治33年(1900)、大正12年(1923)と社殿などの改修が行われています。

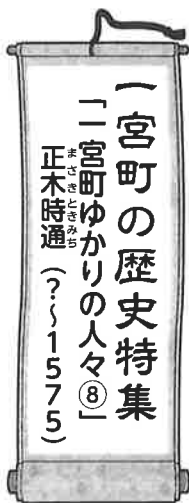
そして平成29年3月、平成19年(2007)より始まった「平成の大修理」が終了し、玉前神社は新たな輝きを放っています。その姿は、まさにこの町のシンボルとしてふさわしいものです。



▲ 玉前神社 社殿

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年6月号



一宮町の歴史特集

「二宮町ゆかりの人々⑧」

正木時通（？～1575）

正木氏は安房国の里見氏の重臣で、上総国小田喜城（現大多喜城）、勝浦城などを拠点に東上総を支配した一族です。時通は勝浦城主・正木時忠の嫡男として生まれました。

父・時忠は里見氏の天文の内乱（天文2年・1533）と言われた事件の際、兄の時茂とともに里見義堯の家督相続に協力したこともあり、里見家中でも重臣として活躍していました。時通はそんな父に従い、戦乱の世を戦っていました。

永禄7年（1564）、時忠・時通父子は突如、里見氏から離反して北条氏に通じ、一族の正木大炊助の上総一宮城を攻め落とします。この際に玉前神社も兵火に罹り焼失したと言われています。写真の古文書はその一連の事件のち、観明寺に出された「制札」と呼ばれる古文書です。観明寺門前での「狼藉」や「喧嘩口論」を禁ずる、など治安維持に関わる内容が書かれています。

これ以後、しばらくの間時通が一宮地域を支配していたとみられます。また、永禄12年頃からは里見氏の圧力が強まり、また北条氏と里見氏の間に和睦の話が浮上するなど、時忠・時通父子は微妙な立場に立たされます。

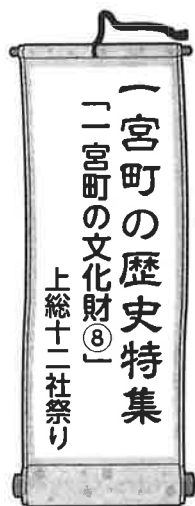
時通の一宮支配も長くは続かず、これからしばらくのちには勝浦正木氏は一宮城より撤退したようです。時通は天文3年（1575）に亡くなりますが、この前後で勝浦の正木氏は里見氏に再び服属したとみられています。



▲ 正木時通制札（町指定文化財、観明寺所蔵）

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年7月号



一宮町の歴史特集

「一宮町の文化財⑧」

上総十二社祭り

上総十二社祭りは毎年9月13日に行われている、玉前神社の秋季例大祭です。「裸祭り」とも呼ばれ、平成15年（2003）には千葉県指定無形民俗文化財となっています。

その始まりは大同2年（807）といわれ、約1200年の歴史を持ちます。当日は玉前神社の祭神・玉依姫が上陸したと伝えられる釣ヶ崎の祭典場へ玉依姫の一族を祀る周辺神社から神輿が集まってきました。御神霊を乗せた神馬と神輿が釣ヶ崎へ向かって砂浜を走る「シオフミ」が行われ、房総に多い浜降り神事の中でも最古の歴史を誇ります。

祭礼は9月8日の「幟立て」に始まり、10日に鶴羽神社（睦沢町）お迎え祭、12日に宵宮祭が執り行われ、13日の例祭を迎えます（14日に「幟返」が行われ終了する）。

現在は玉前神社と南宮神社（宮原）、玉崎神社（いすみ市岬町和泉、中原）、玉前神社（同市岬町椎木、一宮町綱田）からそれぞれ「大宮」「若宮」の2基、谷上神社（同市谷上）から1基の神輿、5社9基の神輿が釣ヶ崎海岸に集ま

ます。

かつては十二基の神輿が集まったことから、十二社祭りという名称で呼ばれています。江戸時代の記録によれば「玉前六社」（玉前神社、玉垣神社（睦沢町）、三之宮神社（同上）、橋樹神社（茂原市）、一之宮神社（茂原市）、南宮神社）それぞれが「大宮」「若宮」2基の神輿が集まり「十二社」ということだったようです。

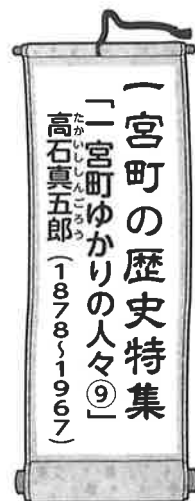
2020年東京オリンピックのサーフィン会場となった釣ヶ崎海岸。歴史と伝統ある、神々の集う海岸で、一宮町の新たな歴史の1ページが刻まれることになるでしょう。



▲ 平成28年の様子

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年8月号



高石真五郎は、明治11年（1878）千葉県鶴舞村（現市原市）に生まれました。慶應義塾大学卒業後、明治34年（1901）に大阪毎日新聞社に外国通信部員として入社、のちに特派員として海外で活動しました。

イギリスやロシアで活動し、オランダのハーグに派遣されている時の明治40年（1907）に発生した「ハーグ密使事件」（大韓帝国が第二次日韓協約の無効を平和会議で訴えようとした事件）をスクープしました。この時この密使と唯一面会し取材した日本人記者が高石だったといえます。

その後が同社政治部長などを経て昭和13年（1938）に毎日新聞社の会長に就任します（昭和21年に全ての職を辞職）。戦後の公職追放によって、毎日新聞社の運営からは離れることとなります。

一宮との関わりは、昭和19年（1944）に一宮川沿いに別荘を購入したことに始まります。「一宮町史」（1964年）の彼のエッセイによれ

ば、戦争が激化する中、別荘として購入したはずが、一宮の「別宅」は事実上の疎開地となり、そこから東京の毎日新聞社に通勤していたといえます。空襲で東京・大阪の住居が焼失してしまつたため、唯一残つた一宮の家で20年近くを過ごしました。

また、高石は国際オリンピック委員会（IOC）の委員を務めており、病床の中で、昭和39年（1964）の東京オリンピック、冬季の札幌オリンピック（昭和47年）の周知に尽力しました。

国際的に活躍した高石は晩年は東京に住し、昭和42年（1967）に88歳で亡くなりました。現在、一宮の彼の別荘跡地には石碑が建てられています。



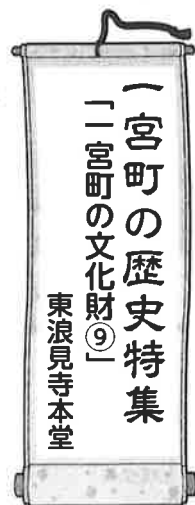
▲高石真五郎別荘跡地石碑（一宮 4493 付近）

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成29年9月号



軍荼利山の麓から、約200段の階段を登ると、仁王門と仁王像が参拝者を出迎えます。そこからさらに先に進んだところにあるのが、今回ご紹介する町指定有形文化財「東浪見寺本堂」です。

東浪見寺は、聖徳太子が軍荼利夜叉明王の像を彫刻して安置したのが開基と伝わり、大同年間（806～810）に行基（668～749）が東国を訪れた際に再刻したものが現在の本尊だと伝わっています。

江戸時代、九十九里沿岸で地曳網漁が盛んに行なわれるようになると、漁業と結びついた信仰として江戸や三浦半島、奥州方面など遠方からの寄進者が多くなり、隆盛をきわめました。

明治以前は「軍荼利堂」と呼ばれ、神仏分離令のため、明治2年（1869）に「東大社」と改称、昭和16年（1941）に現在の軍荼利山東浪見寺となりました。

本堂の向拝（屋根の中央の張りだし部分）の彫刻や建物内部の組物は織

細に仕上げられています。建立年代は向拝正面の扁額に「享保八年癸卯年五月廿八日」（1723年）の刻印があることから、同時代かそれ以前の建築とみられます。

毎年1月28日に行われている軍荼利祭りでは、本尊の「木造軍荼利明王立像」（県指定有形文化財）が公開されます。午前・午後の2回護摩焚きが行われ、午後の護摩焚きの前には天狗が登場します。



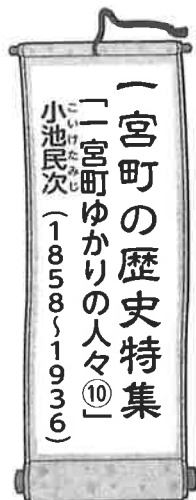
▲東浪見寺本堂

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成29年10月号



一宮町の歴史特集
「一宮町の文化財」⑩
「一宮町の歴史特集」⑩
小池民次 (1858~1936)

小池民次は安政5年(1858)遠江国(静岡県)浜松で誕生しました。小池家は代々、浜松藩主・井上家の家臣で、明治維新に際し、井上家が上総国鶴舞(市原市)に移封されるとそれに付き従いました。

明治6年(1873)、民次は木更津県(千葉県の前身の一部)の教員試験に合格、数えわずか16歳にして教員となりました。その後千葉師範学校千葉大学教育学部(前身)に生徒として入学して、わずか10か月で修業、教員に復職しました。

明治33年(1900)、千葉高等女学校(現千葉女子高等学校)が設置されると主席教諭に着任しました。明治41年(1908)には今までの功績が認められ新設された県立東金女学校(現県立東金高等学校)の校長に着任します。その後千葉高等女学校校長に転じたのち大正2年(1913)に退職しました。

退職後まもなく(同年9月)、一宮町長・加納久宜(1848~1919)の懇請に応じ、私立一

宮女学校の校長に着任、昭和5年(1930)4月まで校長・教員として学校経営にあたりました。

一宮女学校は久宜の他近隣町村の有志163名によつて開校した私立学校で、昭和8年(1933)に廃校となるまで約600名の卒業生を輩出しています。昭和7年段階ではその校舎は現一宮小学校の敷地にあつたことが確認されます。

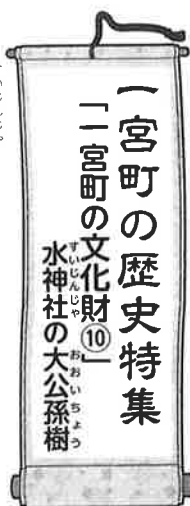
千葉県の教育に多大な功績を残した小池民次。昭和11年(1936)に79歳で亡くなりました。



▲ 私立一宮女学校校門と校舎 (『一宮町史』1964年より)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年11月号



一宮町の歴史特集
「一宮町の文化財」⑩
「一宮町の歴史特集」⑩
水神社の大公孫樹

水神社は船頭給に鎮座し、由緒は不明ですが、天文年間(1532~55)に田中氏が勧請(神仏の分霊を他の場所に移し奉ること)したものと伝わっている神社です。3月1日(現在は3月の第1土曜日)の春祭では「春祈禱」として獅子舞が行われます。「船頭給獅子舞」として町指定文化財(指定)

境内にある大公孫樹は水神社の御神木で、高さは約25m、幹回りは約4mの巨木で、樹齢は400年を越えると見られます。伝承されています。水神社の鎮座時期とほぼ同じというこ

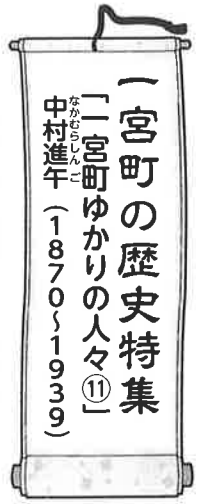


▲ 水神社の大公孫樹

ります。昭和52年(1977)には町の天然記念物に指定されています。昭和40年代頃にお宮の火災が起きた際、一部が延焼したといわれますが、今でもたくさんの実をつけています。平成27年(2015)、長年風雨にさらされ、腐朽が激しくなったことから、地元の方々の協力によつて樹勢回復工事が行なわれました。船頭給区の一つのシンボルとして、地域を見守り続けています。

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年12月号



中村進午は国際法や外交史などを研究していた法学博士です。

明治3年(1870)、中村は旧高田藩(現新潟県)藩士の子として生まれました。明治27年(1894)には東京帝国大学を首席で卒業、大学院入学後、同30年(1897)には学習院大学教授に就任しました。そして同34年(1901)には法学博士となつていきます。

中村進午の名を一躍有名にしたのは、明治36年(1903)の「七博士建白事件」です。中村は東京帝国大学の教授6人とともに、当時の桂太郎内閣の外交を批判し、対ロシア武力強硬路線の選択を迫り、日露開戦を主張する意見書を内閣に提出しました。これが受け入れられたためか不明ですが、この翌年、日露戦争が始まります。

中村は一宮の老女子に別

荘を構え、地域の方々との交流を多く持っていました。町教育委員会で行なった聞き取り調査の記録『町民が語る昭和の一宮』(2008年)には中村との町民の関わりがわかる「記憶」が掲載されています。写真の絵葉書も一宮から出されたものです。度々一宮を訪れていた中村進午。昭和14年(1939)10月、胃潰瘍で倒れ70歳で亡くなりました。



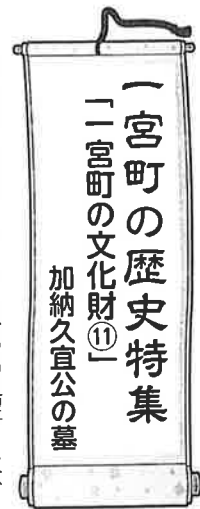
▲ 中村進午の絵葉書 (個人蔵)

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成30年1月号



町の中心地にあり、憩いの場所となっている城山公園。その城山の市街地を眺望できる場所に建っているのが、今回紹介する「加納久宜公の墓」です。昭和50年(1975)に町の史跡に指定されています。

加納久宜公は一宮藩最後の藩主で、一宮町長をつとめた人物です(詳細は広報いちのみや平成28年4月号8ページ上段を参照)。このお墓は大正8



▲ 加納久宜公の墓

年(1919)に久宜公が亡くなると、大正11年(1922)に時の町長・宮重謙輔をはじめとした町民有志の手によって、分骨が納められ、建立されました。墓前の薩摩風石燈籠一対は昭和18年(1943)に鹿児島島の加納知事顕彰会から寄贈されたものです。なお加納家歴代の墓地は東京の谷中霊園(台東区)にあります。

2019年2月、加納久宜公の没後100年を迎えます。彼の偉業を今一度かえりみる、そういう節目の時が近づいています。



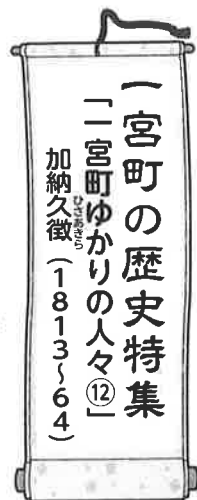
▲ 加納久宜公の胸像 (役場玄関)

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成30年2月号



「一宮町の歴史特集」

「一宮町ゆかりの人々⑫」

加納久徴 (1813~64)

加納久徴は上総一宮藩の2代目の藩主です。一宮に陣屋を移し立藩した久徴(1797~1847)の長男として文化10年(1813)に誕生しました。天保13年(1842)に父の隠居に伴い家督を相続、その後大番頭や講武所(幕府の設置した武芸の訓練所)総裁、奉者番(江戸城中での武家の礼式を管理指導する役職)、若年寄など幕末期の幕府の要職をつとめます。文久元年(1861)には孝明天皇の異母妹・和宮が14代将軍徳川家茂に降嫁した際には京から江戸までの道中の警護役をつとめました。また、文久3年(1863)に九十九里沿岸で蜂起した真忠組の討伐では他藩と協力



▲「拝領押絵 鷹」(町教育委員会所蔵) 画賛によれば文久3年(1863)の作か。画は加納久成(1838~63、久徴の養子)、讚が久徴によるものである。

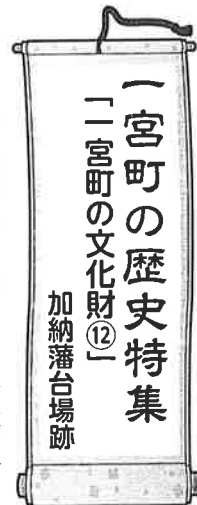
【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

して藩兵を動員して、翌年の1月には鎮圧するなどの功績を挙げました(真忠組の乱)。

一宮藩政においては、天保15年(1844)に灌漑貯水池を拡張し、洞庭湖と名づけたほか、家臣の岩堀市兵衛に命じて市街地へ水路を建設しました。この水路は「市兵衛堀」と呼ばれています。

また、歴史・文化への関心も高かったようで、上総廣常の故事にならい、玉前神社に鎧(萌黄緘胴丸・町指定有形文化財)を奉納したり、廣常の居館跡といわれる高藤山城址に顕彰碑を建設したりしています。真忠組討伐の2ヵ月後の元治元年(1864)3月に死去しました。のちに同じ読み「久朗」がいることから、久徴を「きゆうちよう」と区別して読むこともあります。

平成30年3月号



「一宮町の歴史特集」

「一宮町の文化財⑫」

加納藩台場跡

江戸時代末期、通称「鎖国」体制下の日本の沿岸部には外国船が頻繁に来航しており、房総半島沖も例外ではありませんでした。

幕府内部でも要職をつとめていた時の上総一宮藩主・加納久徴(詳細は前号文化財コラム)は海防のため、一宮海岸に砲台を建設しました。

砲台は5ヶ所、天保15年(1844)に完成し、それぞれ1門ずつ口径6.5センチ、砲身154センチの火縄式



▲現在の台場付近

の大砲が据えられたといいますが(据えられた大砲は七門との伝承もある)。このうち二門は茂原市立美術館・郷土資料館が所蔵しており、千葉県指定有形文化財となっています。

古文書によれば砲台はそれぞれ「鱗芝口」「蓮谷口」「新道口」「古道口」「神道口」と呼ばれていたようです。なお、この台場跡は町の指定史跡となっています。

現在跡地には小高い丘に昭和44年(1969)に建立された石碑が建つのみで、当時の面影はありません。唯一、小字に「台場」「南陣所」などが残るのみです。



▲加納藩台場跡石碑(昭和44年建立)